

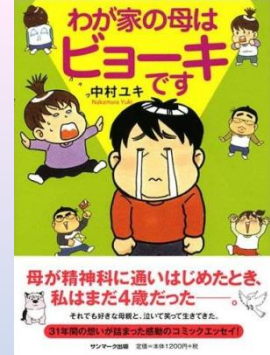
マンガ教材『わが家の母はビョーキです』 (中村ユキ)読了後の 印象と感想のテキスト トマイニング

いとうたけひこ
(和光大学)
小平朋江
(聖隷クリストファー大学)

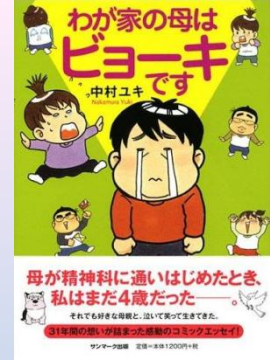
日本看護学教育学会第20回学術集会
大阪国際会議場(グランキューブ大阪)
示説P-154 第4会議場(会議室1003)
2010年8月1日(日曜日)13:10-15:10

【問題①】教材紹介 中村ユキ(2008)

『わが家の母はビョーキです』



- 中村が4歳の時に母が精神分裂病(統合失調症)で精神科に通い始め、それからの31年間を漫画で綴っている。丸みのある柔らかいタッチの絵でありながら、幻聴や妄想など統合失調症の陽性症状は正確でリアルに描かれている。
- 物語りは、中村の母が家族の反対を押し切って結婚した、定職についていない夫のギャンブルと借金癖に苦しみながらも中村を妊娠出産、加えて厳しい姑との生活の中で幻聴が聞こえ始め、ある日、「コエが、飛び込まないとクロスって言うから」と土足のまま近所の家に飛び込んでしまう、という形で発症、初めての入院というところから始まる。それから自殺企図を繰り返したり、服薬を中断して再燃したり、の経過の一部始終を娘の立場で克明に綴り、統合失調症がどのような病気なのかがよくわかる。母は、時折幻聴がひどいと「クロス、クロス」と自宅で包丁を振り回し、娘の中村にも包丁を向けることもあった。「それでも好きな母親と、泣いて笑って生きてきた」娘の思いは終始一貫している。
- 激しい症状の中で措置入院にまで至るが、漫画で母の経過や病状の変化を追いながら、障害年金などの手続きやデイケアなどの社会資源をどう活用するかのアドバイスもある。この1冊で精神医学的な病気の知識、病気を患う本人の思い、家族の思い、精神保健福祉法や年金や医療費などの経済支援、デイケアなどのサポートシステム、向精神薬の副作用のことなど、当事者にとって必要なことがひと通りわかるようになっている。



【問題②】「わが家の母はビョーキです」 の教育的役割 「おわりに」より

・「『トーチツ＝包丁を振り回す危険でコワイ病気』、
そんなイメージを強く残してしまったらどうしよう」

「もっと早くトーチツの正しい知識を持っていたら、母も私もこんなに大変な状況に陥ることはなかったのだろうな～
と思うと、後悔と哀しい気持ちでいっぱいになります。そんな経緯もあり、たくさんのヒトに『トーチツ』という病気を知ってもらえればと思ったのが、この本を描こうと思ったキッカケでした」

- ・ 闘病記のスタイルとしては新しく、当事者にとっても読者にとっても、教育的な役割を果たしてくれるのではないか
- ・ 日本人は子ども時代も、大人になっても漫画をよく読む。

精神障害の闘病記も漫画の形式により、より読まれやすくなり、病気に関する人々の知識と理解が普及し、日本社会から偏見が低減していくのではないか

【問題②】わが家の トータルライフ10カ条

- 1) 困ったときはまわりに相談
 - 2) ドクターや関係先とは情報を共有
 - 3) クスリはかかさずに飲む
 - 4) 疲れる前に休む
 - 5) なるべくひとりで居ない(支援センターに通う)
 - 6) 病気の知識を更新しよう
 - 7) 家族各々が自分の楽しみを持つ
 - 8) 家族同士の距離感を守る
 - 9) 毎日会話をしよう
 - 10) 思いやりと共感と感謝
- ★まさに統合失調症と向き合い、生きてきた結晶がマンガに表現されている。



ある看護学生による

「わが家の母はビョーキです」を読んだ感想

- これまでの軌跡が生々しく綴られており、コミカルに書いてある部分も、もし、自分だったら？と考えると笑えない部分もありましたし（特にナイフを持ったお母さんに襲われるシーンなんて・・・）、ホロリと涙する部分もありました。患者さん、家族も1人1人がこのような思いを抱えて生きており、それに目を向けることは本当に重要なことだと、頭では分かっていたのですが、自分の中でやっと、つながったように思います。ナラティブって本当に大切！！ マンガの中のお母さんも実際、地域生活支援センターでお話するようになって、その人らしく生活できるようになった気がします。この考えをずーと持ち続けられたらいいと思いました。（本人の許可を得て紹介）

【目的】

- TV番組の偏見低減効果研究(小平他, 2007ab;2008;2009)に続き、マンガ教材による偏見低減の効果も確認できた(小平・いとう 2010)ので、
- 読後の自由記述回答を分析し偏見低減の具体像を明らかにする。
- [倫理的配慮]聖隷クリストファー大学倫理委員会の審査を経た。

【研究方法】

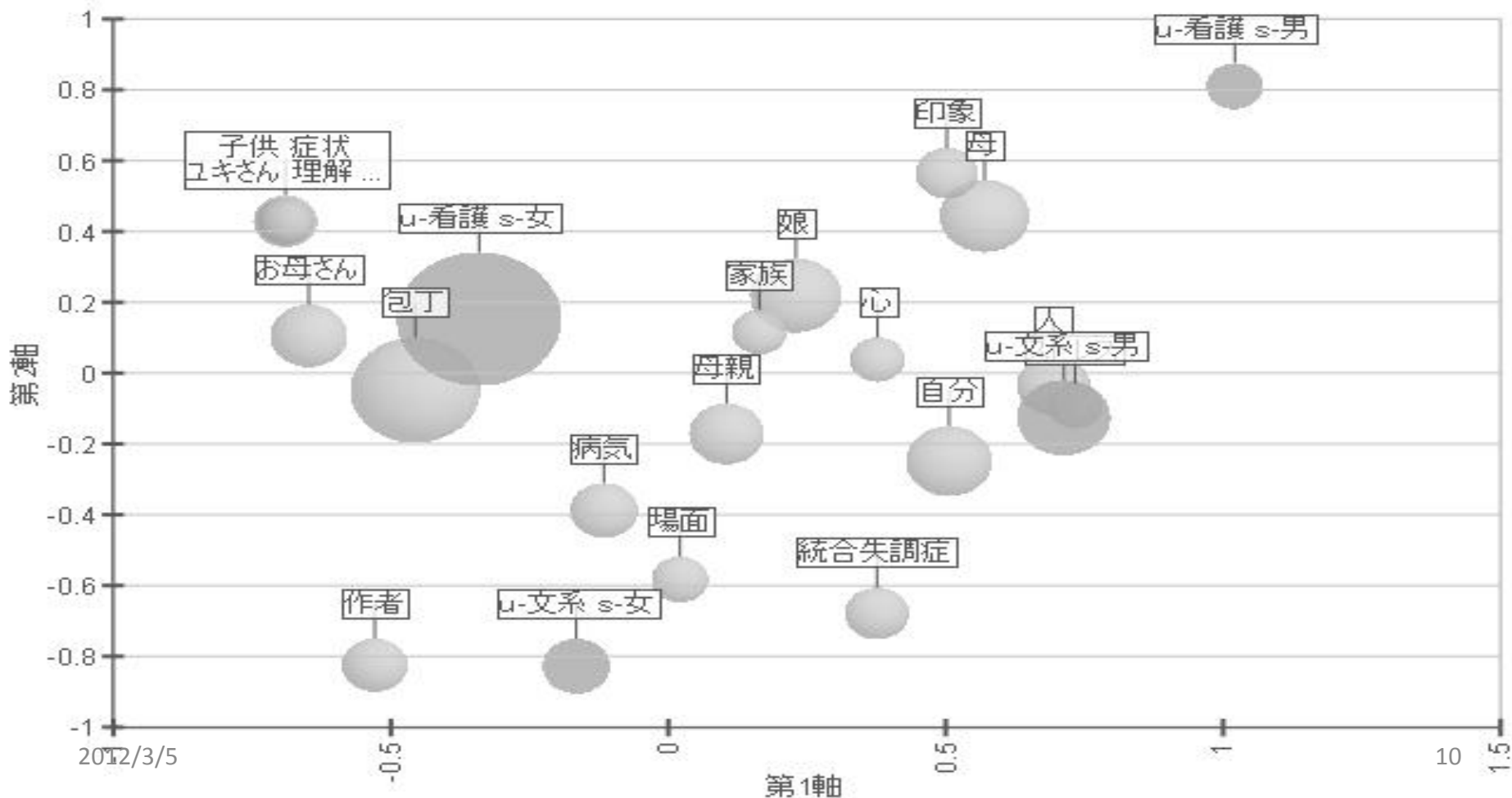
- [研究協力者]文系大学生42人と看護大学生84人。
- [教材]統合失調症の母との暮らしを紹介したコミックエッセイである中村ユキ著(2008)『わが家の母はビョーキです』(サンマーク出版)。
- [質問紙]事後テストとしてAMD尺度と自由記述質問項目からなる質問紙のうち、「一番印象に残った出来事」と「この本の感想」の2問の回答をText Mining Studio Ver3.2により分析した。
- [手続き]2009年10-11月の授業で、読了後の翌週に2回目の質問紙を実施した。

【結果①】単語頻度分析

- 単語頻度分析では、一番印象に残った出来事では、「包丁」「娘」「母」「自分」「お母さん」「殺す」「母親」「人」「持つ」「病気」が上位10単語であり、感想文では、「人」「統合失調症」「病気」「とても」「自分」「本」「読む」「家族」「怖い」「凄い」が上位10単語だった。

【結果②】大学 × 男女の対応分析

- 包丁で筆者を刺そうとした印象が看護女子学生に特徴的、等の傾向を示した。



【結果③】 下位項目上位群下位群の感想文での特徴語の比較

- 指標値はYates補正カイ二乗検定
- $\chi^2 > 3.84$ であれば, $P < .05$

特徴語一覧

	距離-小イメージ-悪	指標値	距離-小イメージ-悪	距離-小イメージ-良	指標値	距離-大イメージ-悪	指標値	距離-大イメージ-悪	距離-大イメージ-良	指標値	距離-大イメージ-良		
1	変わる		7513	理解		5716		恐れ		13621	面白い		6478
2	認知		7404	重要		3875		ストレス		3994	なる		3882
3	持ち出す		403	精神障害		3875		ユキ		2934	言葉		3882
4	本		2907	ある		2423		向ける		2934	友人		3882

【考察①】結果から

- マンガ教材(コミックエッセイ)により学生が統合失調症について人間的な理解が深まったことがテキストマイニングにより明らかになった。
- マンガは精神看護学教育において、活用方法により、良質のナラティブ教材と成る可能性が示された。

【考察②】ナラティブには、 教育的資源としての側面もある

＜語りには、それを聴く者にとって、教育的にも意味のある変化を起すエネルギーがあるのでは？＞

- 小平・伊藤らは、語りを聞く側に生じる態度の変化について、当事者が素顔で出演し病いの体験を語るテレビ番組を録画したビデオを視聴することで、精神障害者に対する偏見がどれだけ減少するかを事前事後テストにより検討する研究に取り組んでいる。「浦河べてるの家」の当事者が出演するドキュメンタリーを用いることで、偏見低減効果があることも確認した。
- 看護学生の感想にあるようなナラティブにより「つながる」ものとは、いったい何なのか？

【考察③】病いの体験を書くこと、読むことの意味

- 試行錯誤の末、自分なりのやり方で症状や障害とつき合っている様子がよくわかる。これから先はわからないが、わからないなりに自分なりに上手くやれた、病気とつき合えた実感→自分の助け方の研究(当事者研究)に似ている 読み手は書き手と対話もしているのではないか？
- 闘病記には説得力があり、様々な文献にも述べられているように、闘病記を社会資源、医療資源と捉えたときには、語りに基づく医療(narrative based medicine:NBM)にもなる→「当事者が主人公の時代」(向谷地生良2009「技法以前べてるの家のつくりかた」医学書院)
- 病いの語りを知恵として蓄積して活用
- 単なる個人の体験を超えて、当事者自らが社会変革のためのきっかけを作っている

【考察④】 闘病記などナラティブ教材の看護学教育における意義

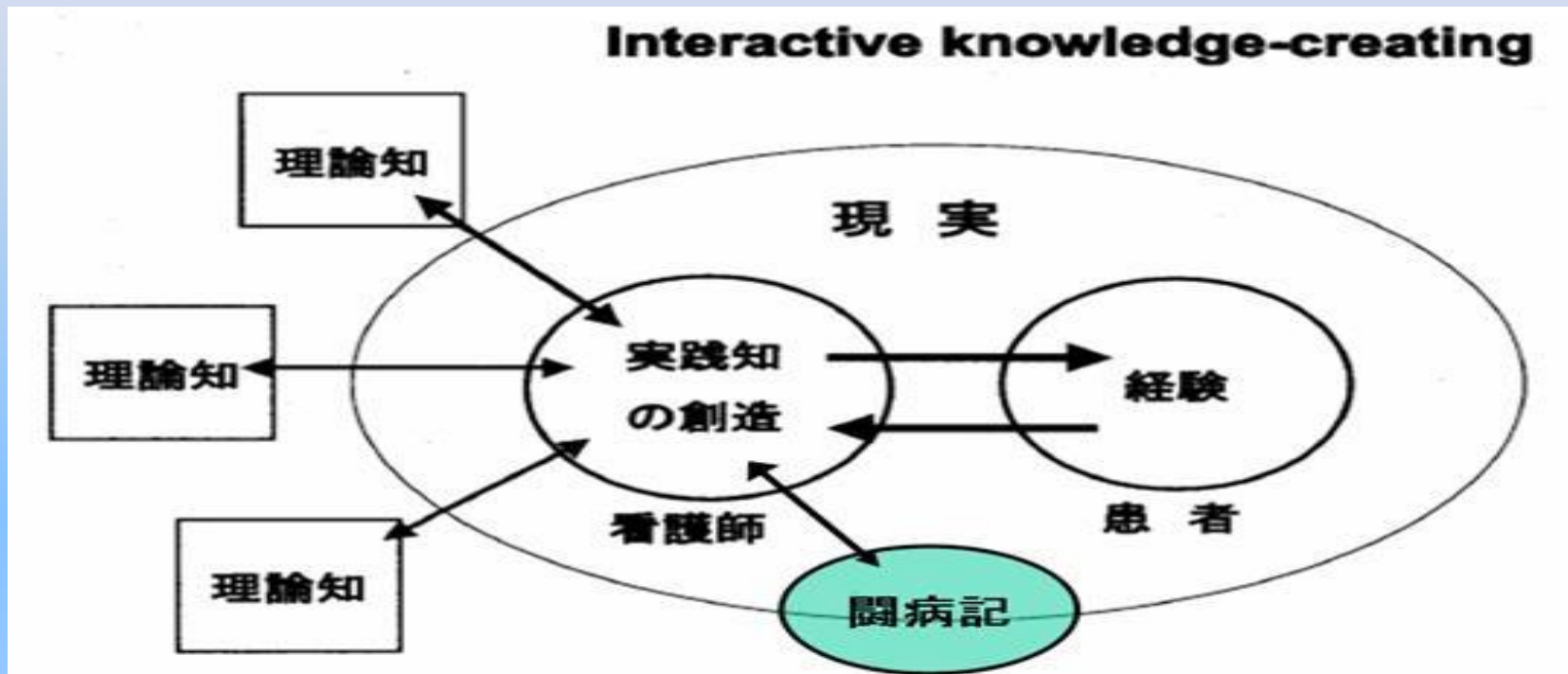


図1 経験を知に変換する「知識構造」図
(中山, 2004) への闘病記の位置づけ